日本のワイルド受容と研究
―― 日本ワイルド協会、ワイルド受容研究、大学教育

佐々木　隆

オスカー・ワイルド研究

第22号

2023年

日本のワイルド受容と研究
――日本ワイルド協会、ワイルド受容研究、大学教育[1]

佐々木　隆

1. なぜ、どうしてオスカー・ワイルドを研究するのか？

オスカー・ワイルド（Oscar Fingal O'Flahertie Wills Wilde, 1854–1900）に限らず、作家および作品の研究はその研究者によりその動機・契機は様々だ。十人十色といったところだ。筆者の場合にはオスカー・ワイルドの研究者との出会いがオスカー・ワイルドの研究を始め、同時に日本ワイルド協会に入会した契機でもあった。人との出会いが研究の出会いとなることは不思議なことではない。富士川義之編集展示「吉田健一展　文學の樂み」（神奈川近代文学館、2022年4月2日～5月22日）[2]では通訳などをしていた吉田健一（1912–1977）がケンブリッジ大学キングス・コレッジに入学し、F. L. ルカス（Frank Laurence Lucas, 1894–1967）の影響を受け、文学を志すようになったことなども紹介されていた（公益財団法人 10–11）（吉田c 144–153）。吉田健一は「英國の近代文学」（1949）でワイルドについて次のように言及している。

> 英國的な生活様式の完成や、その反面である田舎臭さはこの結果であり、これは文学にも反映されてゐる。この傾向は、ペイタアやワイルドの評論、又ワイルドを中心に起つた頽廃派の文学運動などで、十九世紀末に至つて著しい変化を示し始めた（吉田a 23）。

その後、「近代文学論」（1957）の小見出し「近代に表現を与へたワイルド」の中で次のように述べたことは周知の通りである。

> 近代文學は彼からであつて、それが今から百數十年の前のことであるから、文學は多くの場合に時代に先驅するとも言へる。ポオがしたことは、文學を他のものの世界から切り離して文學の世界を獨立させることだつた（吉田c 155）。

筆者もまた人との出会いによりワイルドの研究に携わるようになった。大学院での指導教員との出会いである。指導教員は日本ワイルド協会の設立に係わっていたのである。

ワイルド自身は*De Profundis*（1905）の中で人生のターニングポイントとして2つのことを述べていることは周知の通りである。

> … two great turning-points of my life were when my father sent me to Oxford, and when society sent me to prison（Wilde 915）

第1にオックスフォード大学への進学、第2に監獄に送られたことだ。それぞれ人との出会いという観点からみれば、第1のオックスフォード大学ではギリシアの美学に誘ったマハフィ教授（John Pentland Mahaffy, 1839–1919）と旅をし、第2の監獄投獄については大きな要因となったアルフレッド・ダグラス（Alfred Bruce Douglas, 1870–1945）と出会った。人との出会いにより人生に大きな影響を与えることもあれば、研究に大きな影響を与えることもある。

ワイルドは様々な顔を持つため、そこから生み出される創作作品は小説・童話・詩・劇・講演等、多様である。劇もオペラ、バレエなどへ変容している。また、ジャーナリスト、雑誌編集者としての顔もある。創作作品の内容から美学、唯美主義、ラファエル前派、世紀末文学との関連から研究されることがある。ペイター（Walter Horatio Pater, 1839–1894）、ビアズレイ（Aubrey Vincent Beardsley, 1872–1898）など周辺人物、奇異な人生などが注目を浴びることもある側面を持っている。ワイルド研究のアプローチは様々である。

2. 日本ワイルド協会の存在

外国人作家・劇作家・詩人等の研究がその国でどの程度盛んに行われているのかを見る一つの目安として、翻訳全集、学会の存在が挙げられよう。

本邦初の「ワイルド全集」は1920年3月～9月にかけて矢口達編『ワイルド全集』(天佑社)(全5巻)として刊行された。この全集の評価については、「この全集はわが国Wilde研究に一つのepochを画したものである」(平井181)との評価は、ゆるぎないものであろう。また、ワイルドの受容史全体からみても高い評価を受けている。

> この全集は舞台上演とともにワイルド唯美主義流入の源泉として、同時代の作家らに深い影響を与えた。また、長く作家・学者らの研究の定本としての位置を占め、本邦におけるワイルド移入史を考察する、欠かせぬ意義を有している(築山 510)。

日本における西欧文学の翻訳全集の歴史を見ても、この『ワイルド全集』以前に実質的に全集として世に出たものは、1917年1月～2月に出版された平田禿木・戸川秋骨訳『エマアソン全集』(全8巻)(国民文庫刊行会)くらいであろう。シェイクスピアについては、1905年5月～1909年11月にかけて出版された戸沢姑射・浅野馮虚訳『沙翁全集』(全10巻)(大日本図書)もあるが、これはわずか全10巻10作品の翻訳にとどまり、実質的な全集は、坪内逍遙(1859–1935)によって昭和に入るまで完成しないのである。ワイルドは1891年5月に作品が紹介されてからわずか30年の間で全集が登場したことになる。

天佑社版『ワイルド全集』は1906年にニューヨークで出版されたノッティンガム・ソサエティ版に準拠している。イギリス最初の全集は、1908年にロバート・ロスによるメシュエン版が権威ある全集とされている。イギリスよりもアメリカの方で全集が早く出されたのも、「ワイルドとイギリス」の関係、「ワイルドとアメリカ」との関係を考えると興味深いものがある。天佑社版の全集は1995年10月に日本図書センターより復刻された。復刻版の第5巻には荒井良雄「オスカー・ワイルドの世界――『ワイルド全集』[復刻版]解説」もあり、あらためて『ワイルド全集』(天佑社)の再評価が行わ

れたのである。

学会については学術団体[3]として学会と名乗る団体もあれば、協会と名乗る団体もある。

日本で最初の学術団体は森有礼(1847–1883)等によって1873年に結成された明六社であろう。また、個人名を冠にした学会組織としては1907年に設立したイプセン会(戸板 38、秋田・戸板 60–63)がある。学会の中で個人文学者名が冠に入っている学会は決して多くはない。ディケンズ・フェロウシップ日本支部、日本ウィリアム・フォークナー協会、日本エズラ・パウンド協会、日本サミュエル・ベケット研究会、日本シェイクスピア協会、日本ジョージ・エリオット協会、日本ジョンソン協会、日本ソール・ベロー協会、日本ナサニエル・ホーソーン協会、日本ナボコフ協会、日本ヘミングウェイ協会、日本マラマッド協会、日本ヴァージニア・ウルフ協会等がある。日本ワイルド協会(The Oscar Wilde Society of Japan)はワイルド没後75年にあたる1975年12月6日に設立を記念して「公開座談会と映画の会」を明治大学大学院講堂で開催したことに始まる。設立当時のおもな役員は次の通りであった。

顧問　本間久雄、矢野峰人、平井博
会長　西村孝次
理事　井村君江、小野二郎、川崎淳之助、佐藤喬
幹事　荒井良雄、三好弘、五島正一郎

設立当時の様子については『WILDE NEWSLETTER』(創立20周年記念号、1995年12月)[4]がよい参考となる。ワイルド専門学会についてはイギリスのオスカー・ワイルド協会(The Oscar Wilde Society)が設立されたのは1990年9月のことである。また、Société Oscar Wilde en Franceは2006年1月、The Italian Oscar Wilde Societyは2019年1月に設立されている。[5] 1995年2月にウェストミンスター寺院の詩人コーナー西側の窓のステンドグラスにワイルドの名前が刻み込まれたのは、没後100年を前に再評価が始まった一つの兆しでもあった。いずれにしても世界で最も早くワイルド専門学会が設立されたのは日本なのである。

日本ワイルド協会がこれまで中心になって発行・出版したものには以下のものがある。

『会報』(第1号～第3号) 日本ワイルド協会、1976年4月、1976年8月、1982年4月[6]
本間久雄編『ワイルド研究資料目録』日本ワイルド協会、1976年5月[7]
『WILDE NEWSLETTER』(第1号～第15号) 日本ワイルド協会、1984年7月～1998年8月[8]
『WILDE NEWSLETTER』(創立20周年記念号) 日本ワイルド協会、1995年12月)
山田勝編／日本ワイルド協会協力『オスカー・ワイルド事典ー世紀末イギリス大百科ー』北星堂書店、1997年10月
『ワイルドとの出会い』日本ワイルド協会、2001年5月[9]
富士川義之他編『オスカー・ワイルドの世界』開文社、2013年5月

中でも注目すべきは山田勝編／日本ワイルド協会協力『オスカー・ワイルド事典』(1997) である。当時、日本ワイルド協会第6代会長であった山田勝 (1942–2004) を中心に協会が全面協力した世界初の事典である『オスカ・ワイルド事典』(北星堂書店、1997年10月) も没後100年の記念事業のひとつであった。編集顧問に同協会名誉顧問の西村孝次 (1907–2004) とワイルドの孫、マーリン・ホランド (Christopher Merlin Vyvyan Holland, b. 1945)、編集委員は12名。[10]

山田は「編集後記」の中で次のように述べている。

> ワイルドの演劇や小説を読む時、分かっているようで実は分からない部分が多かった。執事 (バトラー) なる者がよく登場するが、その本来の職務を完全に知らなければ確実に読めたことにはならない。また、イギリス貴族の住居や社交界のしきたり、階級制度、19世紀末の社会状況とその変貌や価値観についても把握しなくてはならない。食生活や衣裳から芸術運動の変遷、さらにワイルドの交友関係など (山田 681)。

事典には副題として「世紀末イギリス大百科」とあるように、単にワイルドだけを扱った事典ではない。なお、この事典の最も注目すべき点は、世界最初のワイルド事典であること、さらに、日本というアイデンティティを持った事典であるということだ。[11] 翌年にはKarl Beckson. *The Oscar Wilde Encyclopedia* (AMS Press, 1998) が出版された。事典類と言う意味ではPeter Raby, editor. *The Cambridge Companion to Oscar Wilde* (Cambridge UP, 1997) もあるが、世界に先駆けてワイルド専門学会を設立、さらにはワイルド事典を出版したのは日本ワイルド協会である。

3. ワイルド受容研究

筆者はこれまで日本におけるシェイクスピアの受容研究やワイルド受容研究に取り組んで来た。[12] 日本ワイルド協会には本間久雄 (1886–1981)、平井博 (1910–1978)、井村君江 (b. 1932) というこの分野における大御所の研究者がいる。受容研究では書誌の作成が必須である。筆者も先行書誌の確認及び新しい情報の追加に務めてきた。拙著「日本ワイルド受容の問題点と展望」(1999) の中で日本でのワイルド研究の課題として「ワイルド劇上演研究」「ワイルドとアイリッシュ・アイデンティティ」「アメリカ講演旅行・書簡研究」(佐々木 360–363) を取り上げた。

ワイルド劇の上演は決して多いとは言えない。ワイルド没後75周年を迎え、日本ワイルド協会が設立された1975年以降に急増している。このことはワイルドの研究書、研究論文の発表数にも反映されている (下記附録を参照)。論文については倍増していることは注目すべきである。

日本のワイルド劇上演に注目してみれば、大正前半から始まる『サロメ』上演、戦後の三島由紀夫演出『サロメ』上演、オペラを含め『サロメ』上演の偏重、風習喜劇の上演はほとんど見られない状態であった。現在ではどうだろうか。『サロメ』以外の上演も徐々に増えてきた。*The Importance of Being Earnest* なども上演されるようになった。朗読による口演なども行われるようになってきたのは新しい動きではないだろうか。最近では劇場に限定されることなく、小さな会場で朗読や朗読劇が上演されるようになったことも注目すべき現象である。朗読では演劇ではない童話作品なども口演された。[13]

書誌的にはイギリス文学からアメリカ文学を独立して取り扱う嚆矢は浅野和三郎『英文学史　付録米国文学史　英詩及種類及び韻律法』(大日本図書、1908)や高垣松雄『アメリカ文学史』(研究社、1927)、イギリス文学からアイルランド文学を独立して扱うようになったのはW. B. イェイツの紹介が「海外文壇・去来の英文学」(『帝国文学』第1巻第3号、1895)、ジョン・シングへの注目から1914年に愛蘭土文学研究会の設立、佐藤清『愛蘭文学研究』(研究社、1922)と分化された経緯がある。戦後において「ワイルドとアイリッシュ・アイデンティティ」に関するものとしては五味田幸夫「アイルランド及びオックスフォード時代のオスカー・ワイルド」(1990)、河野賢司「オスカー・ワイルドとアイルランド」(1992)あたりから研究論文でも取り上げられている。「アメリカ講演旅行・書簡研究」も酒井敏「近代英国批評史に関する断章―4―Oscar Wildeのアメリカ講演旅行」(『東京家政学院大学紀要』(1968))、本間久雄「ワイルドのメンピス宛書簡について―2―」(『実践英文学』(1980))、大川裕「ワイルドとダグラス―書簡からみた2人の交友―1―」(1989)などの研究がある。

4. 大学教育とワイルド

大学教員は教育・研究があり、専任(基幹)教員[14]として勤務していれば、組織の一員として校務・社会貢献の4つの柱がある。なかでも研究の成果をどう教育に生かせるかが、最も関心の高いところである。大学教育の変化というよりも日本の英語教育そのものが大きく変容してきた。実用英語や実務英語、英会話やコミュニケーションを中心にした授業科目が激増し、大学によってはTOEICやTOEFLなどが重視される傾向にある。大学教育における文学の扱いは、文学系の学科等を除けば極端に少なくなっているのが現状である。大学教育として研究の内容をどのように教育に生かせるのか。英語文学を研究する多くの教員が大学等では語学をおもに担当することが多いのではないか。英語文学そのものを扱う授業科目を担当することは少なくなっているのではないだろうか。筆者の場合には本務校で「英語文学」「英書講読Ⅰ」を担当しているが、「英語文学」では英文学史の中でワイルドの作品を紹介するに過ぎず、「英書講読Ⅰ」においてはワイルドの2つの作品、"The Happy Prince" "The Selfish Giant"を原文で読む授業であ

る。この授業はいわゆる訳読の授業ではなく、Read Aloudを主眼とし、原文と日本語訳を交互に音読してもらっている。今から130年ほど前の作品でも英語なら、大きな変化はなく読むことができる。日本なら明治時代の夏目漱石(1867–1916)や森鷗外(1862–1922)の文章をうまく読むことが出来ない場合さえある。漢字が難しい、あるいは文体が難しいなどの理由があるだろう。中学・高等学校の「国語」(国語総合)から明治文学が概ね消えているのが現実である。実際の授業では受講学生が100年以上前の英文であるが、日本語に比べると、はるかに読みやすいことに驚くのである。最近の学生は「活字」離れと言われるが、「文学」離れしているわけではない。マンガ、アニメ、ゲーム、ドラマのストーリーの源泉は文学作品である場合が多い。中・高の学習指導要領における英語が「聞く」「話す」「読む」「書く」の4領域から「発表する」を加え、5領域[15]になっていることを考えると、単にプレゼンテーション、ディベートだけではなく、総合芸術である演劇や話す表現力を高める朗読などはもっと重視されてもよいのではないか?

オスカー・ワイルドを大学教育でどのように生かしていけるのか?ワイルドに限らず、文学を大学教育にどのように生かしていけるのか?芸術が人生を模倣するのではなく、人生が芸術を模倣する。人の心を豊かにするには文学は最高のものではないだろうか。そもそも教育とは何かも考えなければならないだろう。英語教育は教育全体の中の一部でしかない。では教育が目指すものは何か。

教育基本法の第1条は教育の目的として「人格の完成を目指す」とある。人格形成には豊かなこころをはぐくむ必要がある。「豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成」については同法の前文にも記載されているところである。文学作品が教育において果たす役割は、文学という芸術作品が人生の主人公である人格を持った人間の生き方を描写するものであり、人生の疑似体験する機会を与えることになるため、読者によい影響を与えることになるのではないだろうか。

5. ワイルドが再び注目を浴びる

ワイルドが注目を浴びたのは1995年頃から始まったワイルド没後100年

の2000年にかけてであった。1995年1月3日にはヘイマーケットのシアターロイヤルの入口に『理想の夫』の初演100周年の記念円形プレートが入り、同年2月14日にはウェストミンスター・アヴェイの詩人コーナーにワイルドの名前が刻まれた。ブライアン・ギルバート監督『オスカー・ワイルド』(1997)、オリヴァー・パーカー監督『理想の結婚』(1999)、『アーネスト式プロポーズ』(2002)、『ドリアン・グレイ』(2009)が公開された。[16] 日本では2000年10月31日に日本のアイルランド大使館公邸でワイルド没後100周年祭が開催され、日本ワイルド協会も招待された。2021年に開催された東京オリンピック・パラリンピックの基本コンセプトに「多様性と調和」があるが、現在では“LGBT” “LGBTQ” “LGBTQI”[17]などが着目される流れの中で、同性愛の歴史を扱うものも増え、その中で再びワイルドが紹介される傾向が増えている。

2054年はオスカー・ワイルドの生誕200年となる。その時、集える人はここにいる人(読者)のうち、何人いるだろうか？

附録　日本におけるオスカー・ワイルド活動（研究状況）[18]
（佐々木隆調査概略　2022年7月31日現在）

年代	研究書（単）	博論（主）	博論（部分）	論文（主）	日本ワイルド協会	備考
1945–1954	1	0	0	19	—	ワイルド没後50周年
1955–1964	1 特1	0	0	47	—	
1965–1974	0	2	0	77	—	
1975–1984	5 特2	1	0	146	会報3 WN1	日本ワイルド協会設立
1985–1994	1 特1	0	1	180	WN10	
1995–2004	20 特3	4	3	220	WN4 OW6	ワイルド没後100年
2005–2014	22 特1	4	0	144	OW7	
2015–現在	6	2	0	26	OW7	
合計	56 特8	13	4	858	38	

※研究書等（単独）では書名ではなく、その内容による。博士論文、科研費、論文も同様であるが、オスカー・ワイルドあるいは作品名等がタイトルに使用されていることが多い。世紀末、唯美主義が中心となりワイルドの扱いが主でない場合には今回は取り上げていない。博士論文（博論）は学位授与年による。なお雑誌の特集でワイルドやワイルドの作品が掲載されている場合には研究書等（単独）のところに（特3）のように示した。

事例　4　特3　この場合には研究書4，雑誌特集3となる。

※論文の基準として学会誌、大学・研究機関の紀要、研究会誌等に掲載された本数。

※日本ワイルド協会のところでは協会が発行している『会報』『WILDE NEWSLETTER』『オスカー・ワイルド研究』（省略して（会報）、（WN）、（OW）とした）については論文数や記事数ではなく、発行された冊数を取り上げた。

附録　日本におけるオスカー・ワイルド活動
（劇上演・朗読・オペラ・バレエ・コンサート等）[19]
（佐々木隆調査概略　2022年7月31日現在）

年代	劇上演	朗読・朗読劇	オペラ・歌劇	バレエ・ダンス	コンサート	備考
1945–1954	1	0	0	3	0	ワイルド没後50周年
1955–1964	2	0	0	1	0	
1965–1974	5	0	0	3	0	
1975–1984	13	0	0	2	1	日本ワイルド協会設立
1985–1994	15	5	1	6	2	
1995–2004	30	14	3	5	2	ワイルド没後100年
2005–2014	20	12	0	5	3	
2015–現在	18	1	0	1	1	
合計	104	32	4	25	7	

※同じ年の巡回公演、再演は1として数え、年がまたがる場合には2として数えた。コンサートの場合には曲目が1つでも含まれているものが確認できた場合には1として数えた。
※ワイルド作品ではないが、ワイルド作品に関連するものもワイルド劇に含めた。『女優　松井須磨子』等。
※ミュージカル・人形劇はワイルド劇に含めた。
※コンサートには演奏会・合唱も含む。

注

1　本稿は日本ワイルド協会第47回大会（2022年12月3日、実践女子大学［渋谷］）における特別講演「オスカー・ワイルドと私ー日本ワイルド協会、ワイルド受容研究、大学教育」の講演内容を基にまとめたものである。講演では演目に「私」とあるようにプライベートな内容がかなり含まれていたが、投稿にあたりこうした部分を最小限にとどめ、書誌的情報を適宜加えた。なお講演当日はパワーポイント（スライド41枚）を使用し、配布資料（33頁）を補足的に活用した。配布資料は現在でも https://www.econfn.com/ssk/kouen/kouen132.pdf で公開している。

2　富士川義之編集展示「吉田健一展　文學の樂み」（神奈川近代文学館、2022年4月2日～5月22日）
https://www.kanabun.or.jp/webshop/16548/. Accessed 18 Jan. 2023.

3　「日本学術会議協力学術研究団体」
https://www.scj.go.jp/ja/group/dantai/index.html. Accessed 6 Feb. 2023.
なお、2023年2月11日段階で、日本ワイルド協会は日本学術会議協力学術研究団体には登録されていない。

4　『WILDE NEWSLETER』（創立20周年記念号、1995年12月）については日本ワイルド協会ホームページの *WILDE NEWSLETTER* には2023年2月10日時点では掲載されていない。
創立20周年記念号は第12号（1995年7月）と第13号（1996年7月）の間に発行されている。その掲載内容（目次）については佐々木隆編『日本ワイルド研究書誌』（イーコン、2009年2月、p.467）及び佐々木隆編『日本ワイルド研究書誌（追加増補版）』（多生堂、2023年2月、p.417）に掲載されている。

5　"The Oscar Wilde Society"　https://oscarwildesociety.co.uk/. Accessed 11 Feb. 2023.
※同ホームページの "Membership" には日本ワイルド協会が以下のように紹介されている。
The Oscar Wilde Society of Japan
The purpose of this association is to deepen the understanding of Oscar Wilde through study groups, lectures, and publication of research journals. It was founded in 1975, 75 years after Oscar Wilde's death, and is intended for a wide range of people who are interested in Oscar Wilde, mainly researchers, graduate students, and undergraduate students. Learn more. https://oscarwildesociety.co.uk/membership/. Accessed 11 Feb. 2023.

6　『会報』（第1号～第3号、日本ワイルド協会、1976年4月、1976年8月、1982年4月）は日本ワイルド協会ホームページでは公開されていないが、その掲載内容（目次）については佐々木隆編『日本ワイルド研究書誌』（イーコン、2009年2月、pp.460–461）に掲載されている。

7　https://www.wildesj.org/%E3%83%AF%E3%82%A4%E3%83%AB%　E3%83%89%E7%A0%94%E7%A9%B6%E8%B3%87%E6%96%99/%E3%83%AF%E3%82

%A4%E3%83%AB%E3%83%89%E7%A0%94%E7%A9%B6%E8%B3%87%E6%96%99%E7%9B%AE%E9%8C%B2/. Accessed 14 Feb. 2023.

8　https://www.wildesj.org/%E3%83%AF%E3%82%A4%E3%83%AB%E3%83%89%E7%A0%94%E7%A9%B6%E8%B3%87%E6%96%99/wilde-newsletter/. Accessed 14 Feb. 2023.

9　『ワイルドとの出会い』(日本ワイルド協会、2001年5月)は日本ワイルド協会ホームページでは公開されていないが、その掲載内容(目次)については佐々木隆編『日本ワイルド研究書誌』(イーコン、2009年2月、p.471)に掲載されている。

10　編集委員のひとりとして筆者(当時、日本ワイルド協会理事・事務局長)も参画していた。山田は阪神淡路大震災(1995)の発生の影響を受け、最終的な編集作業は川崎淳之助と筆者で進めた。

11　「第2部　オスカー・ワイルドと日本」が配置されている。

12　日本ワイルド受容研究については『日本ワイルド総覧』(イーコン、2007年2月)、『日本ワイルド研究書誌　追加増補版』(多生堂、2023年2月)をはじめ、論文なども発表している。ホームページ「佐々木隆研究室」(https://ssk.econfn.com/newpage2.html#link. Accessed 22 Feb. 2023.)で公開している。

13　佐々木隆編『日本ワイルド研究書誌　追加増補版』(多生堂、2023年2月)の「ワイルド劇上演年表」を参照。

14　「基幹教員」は「大学設置基準等の一部を改正する省令等の交付について(通知)」(4文科高第963号令和4年9月30日)による。

15　『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説　外国語編　英語編』(文部科学省、2017年7月、p.8)、『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説　外国語編　英語編』(文部科学省、2018年7月、pp.6–7)より。

16　映画では日本公開の邦題で示した。

17　新村出編『広辞苑』(岩波書店)では2018年1月の第7版(p.342)で初めて見出し語となった。松村明編『大辞林』(三省堂、2019年11月)には見出し語にはなっていない。

18　「附録　日本におけるオスカー・ワイルド活動(研究状況)」(2022年12月3日、特別講演の配布資料より)。なお、ホームページ「佐々木隆研究室」(https://www.econfn.com/ssk/kouen/kouen132.pdf. Accessed 18 Feb. 2023.)で公開中。佐々木隆編『日本ワイルド研究書誌(増補版)』(イーコン、2014年9月)の追加調査含む。

19　「附録　日本におけるオスカー・ワイルド活動(劇上演・朗読・オペラ・バレエ・コンサート等)」(2022年12月3日、特別講演の配布資料より)なお、ホームページ「佐々木隆研究室」(https://www.econfn.com/ssk/kouen/kouen132.pdf. Accessed 18 Feb. 2023.)で公開中。佐々木隆編『日本ワイルド研究書誌(増補版)』(イーコン、2014年9月)の追加調査含む。

引証資料

秋田雨雀・戸板康二(1958).「第1回対談日本新劇史」、『新劇』、第5巻第11号、白水社。

公益財団法人神奈川文学振興会編(2022).『生誕110年　吉田健一展　文學の樂み』、県立神奈川近代文学館。

佐々木隆(1999).「日本のワイルド受容の問題点と展望」、日本英語文化学会編『異文化の諸相』、朝日出版社。

築山尚美(1997).「ワイルド全集」、山田勝編、日本ワイルド協会協力、『オスカー・ワイルド事典ー世紀末イギリス大百科ー』、北星堂書店。

戸板康二(1978).「イプセン会」、『悲劇喜劇』、3月号、早川書房。

平井博(1980).『オスカー・ワイルド考』、松柏社。

山田勝(1997).「編集後記」、山田勝編、日本ワイルド協会協力、『オスカー・ワイルド事典ー世紀末イギリス大百科ー』、北星堂書店。

吉田健一a(1949).「英國の近代文学」、『あるびよん』、創刊号、新月社。

吉田健一b(1957).「近代文学論」、『文学界』、第2月号、文藝春秋社。

吉田健一c(1993).『交遊録』、『吉田健一集成』、3、新潮社。

Wilde, Oscar (1990). *De Profundis*. Foreman, F. B., general editor. *The Complete Works of Oscar Wilde Fingal O'Flahertie Wills Wilde: Stories Plays Poems Essays*. Collins.